

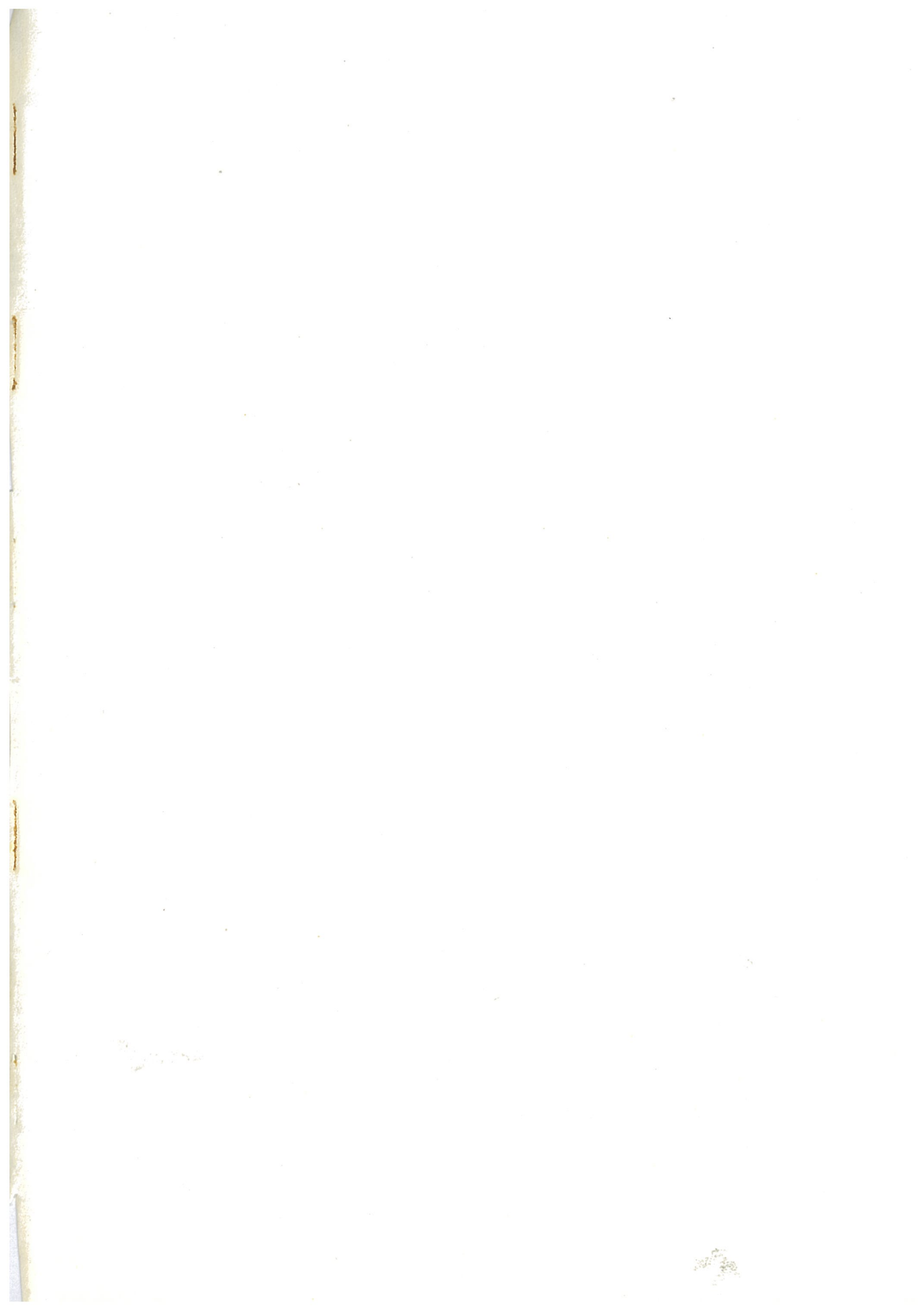
墳 古 又 仮

宇土半島基部古墳群分布調査報告〔I〕

宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集

1982

熊本県宇土市教育委員会



墳 古 又 仮

宇土半島基部古墳群分布調査報告〔I〕

宇土市埋蔵文化財調査報告書第6集

1982

熊本県宇土市教育委員会

11

12

13

14

15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100

序 文

本市が位置しています宇土半島基部一帯は、熊本県でも最も古くから古墳文化が展開した地帯として知られ、九州の古墳文化を研究する上でも重要な地域とされています。

仮又古墳は大正の初期にはすでに学界にも紹介され、壁面に描かれた装飾文様から仮又古墳の名を高らしめました。

今回、宇土半島基部古墳群分布調査事業の一環として、国および県の補助を受け仮又古墳の発掘調査を実施しました。その結果、数多くの成果を得ることができ、改めて貴重な古墳であることが判明しました。

このような先人の残した貴重な文化財を後世に伝えるのは、現在の我々に課せられた責務だと考え、今後は教育の場で遺跡の保護活用を図るのが急務であると痛感します。

最後になりましたが、調査に際しご協力をいただきました関係各位に対し衷心より厚く謝意を表します。

昭和57年3月

宇土市教育委員会

教育長 船 田 至

例 言

1. 本書は、宇土市教育委員会が昭和56年度の国庫補助事業として実施した、仮又古墳の調査報告である。
2. 本文実測図で用いたレベルは、仮B. M. からのものである。
3. 出土遺物は、宇土市教育委員会が保管している。
4. 本書に使用した図は調査者全員によるものである。掲載写真は木下洋介・平山による。
5. 本書の作成にあたって河上正二・揚村浩之氏の協力をえた。
6. 本書の執筆及び編集は平山が担当した。

本文目次

第I章 序説	1
1. はじめに	1
2. 調査の組織	1
3. 位置と環境	2
第II章 調査の記録	6
1. 墳丘	6
2. 列石	6
3. 石室	13
4. 装飾文様	13
5. 出土遺物	14
第III章 結語	21

挿図目次

Fig 1 周辺の古墳時代遺跡分布図	折込み
Fig 2 墳丘測量図 (1/200)	折込み
Fig 3 N-T実測図 (1/40)	折込み
Fig 4 S-T実測図 (1/40)	折込み
Fig 5 石室実測図 (1/40)	折込み
Fig 6 西側壁装飾文様 (1/10)	折込み
Fig 7 東側壁装飾文様 (1/10)	折込み
Fig 8 出土遺物実測図-1	19
Fig 9 出土遺物実測図-2	20

図 版 目 次

- PL. 1 仮又古墳遠望（東側より）
調査前の状況（西側より）
- PL. 2 調査前の状況（羨門側）
調査前の状況（玄室部分）
- PL. 3 N-T列石出土状況（西側より）
N-T列石出土状況（東側より）
- PL. 4 N-T列石出土状況（北側より）
N-T列石出土状況（南側より）
- PL. 5 N-T列石出土状況（西側より）
石室清掃後の状況（羨門側より）
- PL. 6 S-T墓道検出状況（北側より）
石室清掃後（奥壁側）
- PL. 7 石室清掃後（羨門側）
羨門部鉄滓出土状態
- PL. 8 玄室内遺物出土状態（瓦質土器）
玄室内遺物出土状態（染付片）
- PL. 9 玄室内遺物出土状態
永禄7年銘板碑
- PL. 10 出土遺物

第 I 章 序 説

1. はじめに

宇土半島基部周辺にみられる古墳は、熊本県でも濃密な分布を示し、この中には4世紀まで遡る古式古墳もある。これらの古式古墳は県内でも最も古く、熊本県はもとより九州の古墳文化研究の上で欠くことのできない重要な地域となっている。今回、国・県の補助を受け宇土半島基部重要古墳確認調査事業の初年度として仮又古墳^{註1}の発掘調査を行なった。なお調査は、後年の整備も前提としているため最小限に留めた。仮又古墳は、大正8年10月に刊行された京大報告の中で、石室内壁面に線刻の装飾文様をもつ古墳とし紹介され学史的にも著明な古墳である。

発掘調査は昭和56年8月から行ない、同年12月でほぼ調査を終えた。調査に当っては地主の村上三二氏はじめ、各方面から多大なご協力をたまわった。記して感謝の意を表したい。

2. 調査の組織

調査主体 宇土市教育委員会

教 育 長	船 田 至
社会教育課長	山 村 茂
文 化 係 長	一 宗 雄
庶 務 会 計	内 田 憲 子
	高 木 恭 二
発 掘 調 査	平 山 修 一
	木 下 洋 介

補 助 員	古 城 史 雄	松 尾 法 博	古 莊 千 栄 子
(以下敬称略)	坂 田 和 弘	西 谷 大	渡 辺 千 恵
	平 井 利 枝	武 内 由 紀 子	蒲 原 卓
	井 上 信 之	田 村 三 夫	白 浜 和 敏
	内 山 省 吾	明 瀬 慎 吾	池 田 伸 二
	山 神 孝 弘	内 田 哲 朗	宮 川 栄 助
	宮 本 恵 吾	谷 口 茂	

地元協力者 村 上 三 二 山 羽 シマ子 上 野 ナツエ

宮田 ハルエ 村田 イネ 飯田 ミ子
荒川 昭子 飯田 富子 杉本 エミ
井上 頼子

調査協力 富樫 卯三郎(市文化財保護委員) 白木原 和美
甲元 眞之(熊本大学) 松本 健郎 高木 正文
柳原 真由美(熊本県文化課) 勢田 広行
安達 武敏 河北 毅(宇土城跡三ノ丸遺跡発掘調査団)

3. 位置と環境

宇土市は熊本県のほぼ中央部に位置し、西に突出する宇土半島の北岸および半島頸部一帯を占める。宇土半島頸の平野部は、西に半島の高峯大岳(標高478m)から延びる丘陵と、東には雁回山(標高314m)から派生する丘陵とが対峙し狭隘な平野部を形成している。この狭隘な部分で、最も狭い宇土市と不知火町境界付近では幅約1.2kmほどで、熊本平野と八代平野とを結ぶ唯一の平野部となっている。現在この狭隘地帯を国道3号線と、鹿児島本線が通り交通上の要衝になっている。

熊本県内で最も古くまで遡る古墳は、現在宇土半島頸地域に濃密にみられ、これらは前述の狭隘地帯を中心に不知火海側に分布する。このように一帯は、本県では最も古くから古墳文化を受容した地区で、九州の古墳文化を研究する中でも重要な地域となっている。宇土半島基部一帯が、県内でも最も古く古墳文化を享受し、展開していった要因として、陸路で熊本平野と八代平野とを結ぶ交通の要衝にあたること。北に熊本平野の南部を西流し有明海に注ぐ緑川の河口が、南には不知火海に流入する大野川の河口が半島南側基部にあり、この二つの川の河口に挟まれていること。さらに有明・不知火海沿岸の位置にあたることなど、一言でいえば地形的に優位な地域を占めることに起因する。前時代の弥生時代中期にみられる北九州の須玖式文化圏の南限が、概この周辺に求められることから、半島基部一帯が一時期における外からの文化受け入れの前線的な地帯になっている。このような中において、熊本でも最も古い古墳文化も必然的には入りうる要素あったといえる。

ところで仮又古墳は、大岳山塊の東丘陵傾斜面、標高約45mを測る地点に位置し、地籍は宇土市恵塚町字仮又965-6番地で現状は雑木林である。

周辺には縄文時代から各時代に亘る遺跡がみられるが、ここでは古墳時代の遺跡に限り述べる。本墳の脚下には、飯塚川によって開折された谷が入り込み、この谷を挟んで対峙する丘陵には東畑1・2号墳・金嶽山古墳、それに椿原石蓋土墳^{註4}などが所在する。さらにこの丘陵を越えた個所にも後期の古墳がみられる。前述の東畑1・2号墳・金嶽山古墳は、すでに盛土は欠なわれ石室を露呈している。両墳とも仮又古墳同様の安山岩の巨石を用材に使った横穴式石室



周辺の古墳時代遺跡分布図

1 梅崎古墳	横穴式石室 (線刻装飾)	44 塩屋浦鬼の岩屋 1号墳	横穴式石室
2 梅崎箱式石棺		45 塩屋浦鬼の岩屋 2号墳	
3 城塚古墳	横穴式石室 (線刻装飾)	46 桂原古墳	横穴式石室 (線刻装飾)
4 尾ノ上横穴群		47 桂原 2号墳	横穴式石室 (線刻装飾)
5 神ノ木山古墳	横穴式石室	48 二本松箱式石棺	
6 天神山古墳		49 於呂口箱式石棺	
7 経塚古墳	横穴式石室	50 キツネ塚古墳	
8 東畑 1号墳	横穴式石室	51 鬼の岩屋古墳	
9 東畑 2号墳	横穴式石室 (線刻装飾)	52 神ノ上古墳	横穴式石室
10 金嶽山古墳	横穴式石室	53 猶崎古墳	
11 椿原石蓋土壇		54 夫婦塚古墳 (女塚)	
12 仮又古墳	横穴式石室 (線刻装飾)	55 夫婦塚古墳 (男塚)	
13 北平遺跡	包蔵地	56 古保里箱式石棺群	
14 西岡台遺跡	V字溝	57 二枝古墳	
15 西岡台箱式石棺		58 晩免古墳	
16 宇土城遺跡	包蔵地及び線刻装飾石材	59 潤野古墳	
17 猫城古墳		60 西潤野古墳	
18 神合古墳		61 神ノ山古墳群	
19 城ノ越古墳		62 境目遺跡	包蔵地
20 久保古墳		63 境目箱式石棺群	
21 スリバチ山古墳		64 上松山箱式石棺	
22 迫ノ上古墳		65 畑中遺跡	
23 大平横穴群		66 樋底古墳	横穴式石室
24 鬼塚古墳	横穴式石室	67 チャン山古墳	
25 仁王塚古墳		68 南山内古墳	
26 南請遺跡	包蔵地	69 南山内箱式石棺群	
27 柳迫古墳		70 御手水古墳	
28 塚原平古墳		71 向野田石蓋土壇墓	
29 十五社箱式石棺群		72 向野田古墳	
30 大迫 1号墳	横穴式石室	73 御手水 2号墳	
31 大迫 2号線	横穴式石室 室	74 キリギス山古墳	
32 栗崎 2号墳	横穴式石室	75 柏原古墳	
33 栗崎 1号墳	横穴式石室 (線刻装飾)	76 御領東原 3号墳	横穴式石室
34 鴨籠 2号墳	横穴式石室	77 御領東原 2号墳	横穴式石室
35 鴨籠古墳		78 宇賀岳古墳	(線刻装飾)
36 朱斗窯跡	須恵器窯跡	79 御領東原 1号墳	横穴式石室
37 元米ノ山窯跡	須恵器窯跡	80 出町遺跡	包蔵地
38 弁天山箱式石棺群		81 畑中古墳	
39 弁天山古墳		82 琵琶田窯跡	須恵器窯跡
40 東塩屋浦古墳		83 上ノ原遺跡	包蔵地
41 八久保古墳		84 松橋大塚古墳	
42 国越古墳	横穴式石室	85 前田遺跡	包蔵地
43 道免古墳		86 狐塚古墳	

Fig 1 周辺の古墳時代遺跡分布図

で、東畑古墳には線刻による装飾文様が描かれている。また仮又古墳の東約500mほどにある北平遺跡では弥生時代から古墳時代にかけての遺物の出土をみる。このように付近一帯の丘陵は、古墳時代でも後期の墳墓域になっている。

註

1. 濱田耕作・島田貞彦・梅原未治「肥後国宇土郡緑川村の古墳」『九州に於ける装飾ある古墳』京都帝国大学考古学研究報告第3冊 1919 京都
2. 北條暉幸・平山修一・木下洋介「宇土市松山町畑中遺跡出土の甕棺」『宇土市史研究第2号』宇土市史研究会・宇土市教育委員会 1981 宇土
3. 的場義夫「装飾をもつ宇土市飯塚天神古墳発足のいきさつ」『宇土ところどころ』 1978 宇土
4. 三島格「宇土市轟椿原における石蓋土墳の一例」『熊本史学15・16号』1959 熊本

第II章 調査の記録

1. 墳 丘

本墳は北東に延びる丘陵傾斜面に位置し、等高線に対しほぼ平行する様に構築され、標高約45 mを測る。墳丘盛土は立地上、長年の雨水によって流出し、その大半が欠なわれ石室の天井石まで完全に露呈している。東側で比高差が約3 mほどを測る。

墳丘は調査前、外面的な観察から方墳の可能性もあったが、後述する列石から南北14m、東西約12mの円墳と判明した。墳丘確認のため当初4本のトレンチを入れる予定であったが、保存を前提にした調査であるため、最少限の調査に留めた。

調査の結果墳丘構築は、第一工程に旧地形をテラス状に掘削し地山整形を行なっている。これはN-T地山面および石室腰石が直接地山上に置かれていることから、現状での墳頂から約1.5 m行なわれている。次の工程に石室腰石の配置と、東側および北側に列石を巡らせる。この時腰石の安定のため、同上面まで盛土を行なう。最後に石室天井石架構後、その上に盛土を行なう。現在は2段目の盛土が流出し一段目のみの盛土が残っているものと思われる。この盛土は断面観察からも版築など行なわれず一気になされた状態を示している。

墳丘平面は南北14m、東西で約12mを測る歪な円形をなす。西側は入れたトレンチが地権者の異いから西側の墳丘裾の確認には至らなかったが、N-Tの西端断土層面からみて旧地表面はかなり下がっていることから西側は丘陵上面と画する何らかの施設がなされていると考えられる。

2. 列 石

墳丘東側と北側の二方向を3段に巡らす。用いている石材は50～70 cmほどの安山岩塊石で、一部に凝灰岩の切り石が混じる。第1段目の列石はN-T北端付近で検出されたが、この列石が北側および東側の墳丘最下段を囲堯する。第2段目は最もしっかりした遺存状態を示し、右羨門へ続く。第3段目の列石はN-Tの石室奥壁寄りで検出したが、東側はトレンチを入れていないので不明である。しかし、一部露出している列石から石室右玄室付近に繋る。東側は未調査であるが、N-Tの東端の状態からみても一部崩落もあるが、列石が続くと考えられる。また、西側はW-Tに一段もかからないことから、当初からこの部分には列石がないと思われる。

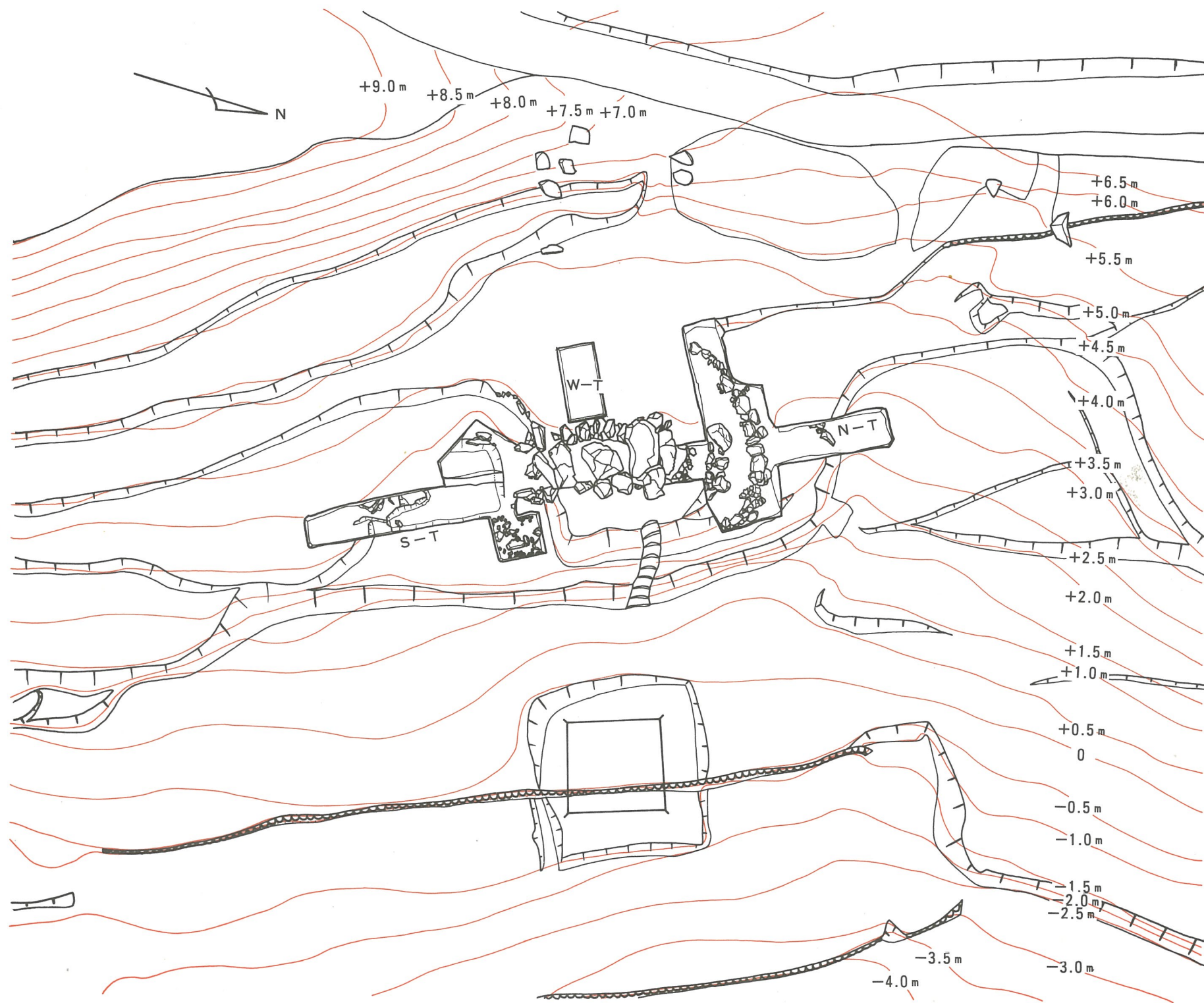


Fig2 墳丘測量図 (縮尺 1/200)

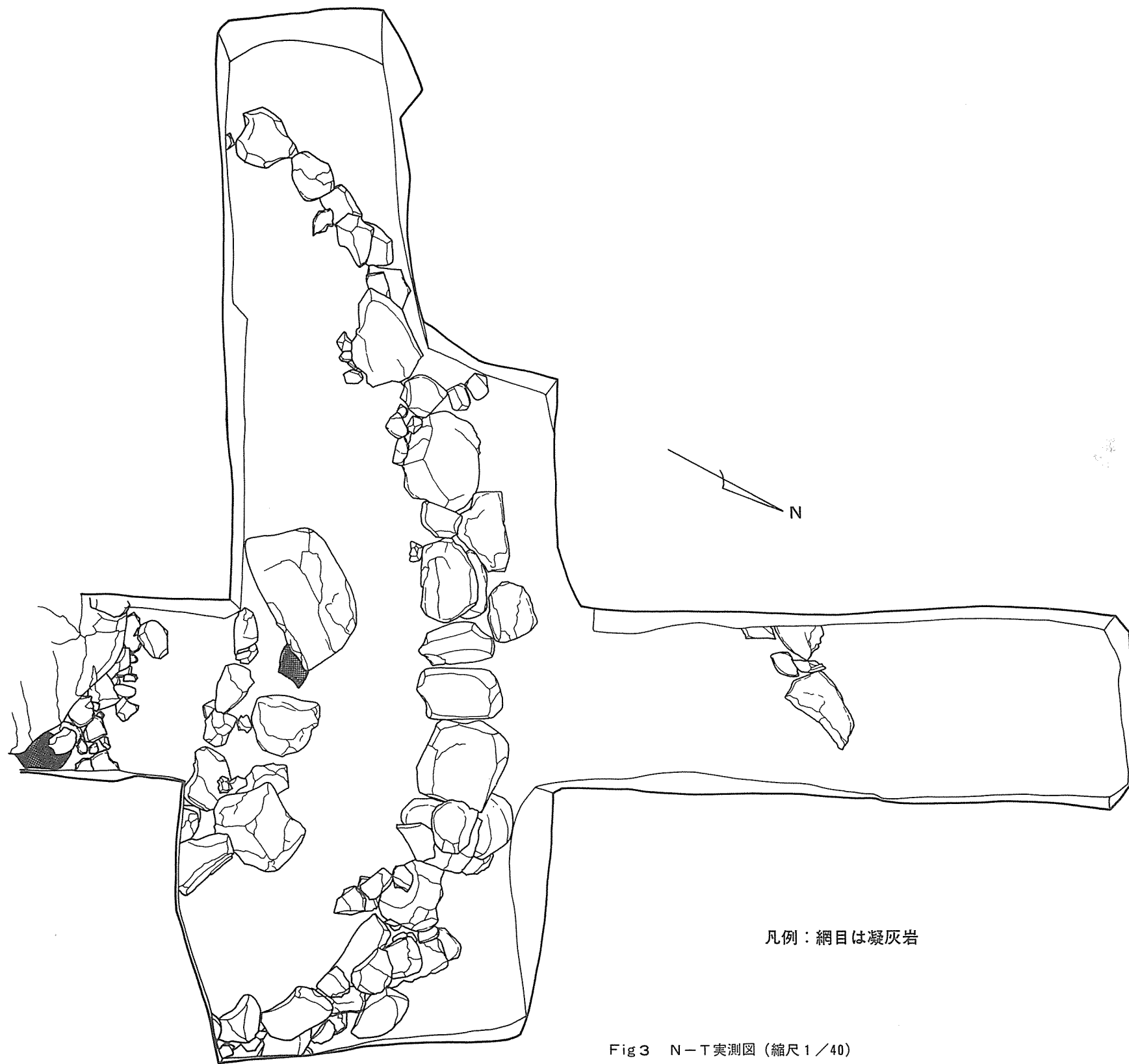


Fig3 N-T実測図 (縮尺1/40)

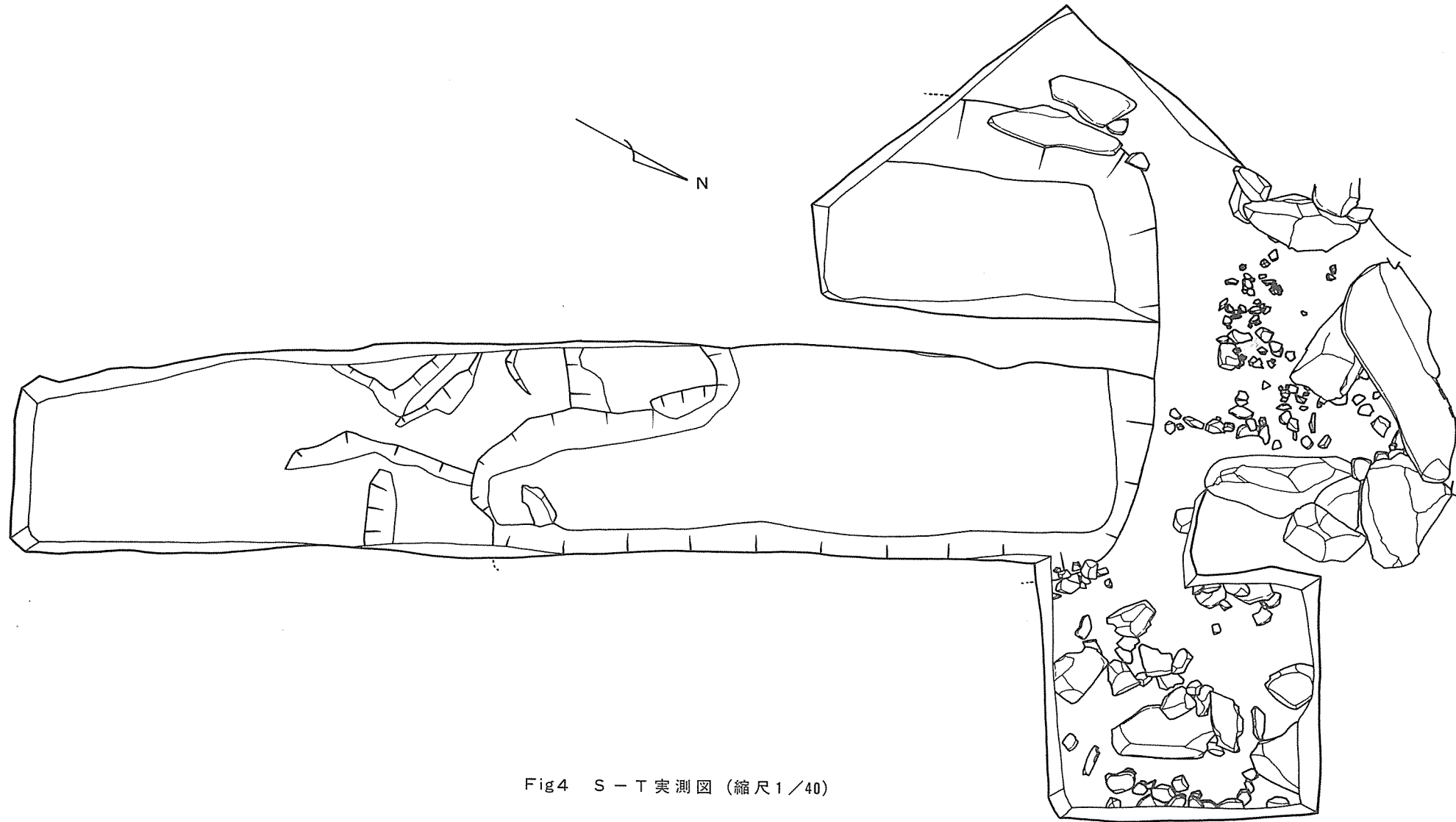


Fig4 S - T 実測図 (縮尺1/40)

3. 石室

本墳の埋葬主体部は南東に開口する単室無袖の横穴式石室で、右側壁で全長5.96m、幅1.77m（玄室中央）、高さ1.66m（現況）を測り、主軸をN29°Wにとる。

天井部は玄室が3石からなり、羨道部の天井については不明である。玄室に架設する天井石は奥壁にかかる一枚だけが、現位置からかなりずれた状態でかかり、中央の天井石は西側が玄室内に落ちこんでいる。残る一枚も玄門側にずれ落ち、その後石材を転用するためか契が入っている。側壁は三方とも腰石だけが旧状をたもつが、その上の側石はずれ、一部は玄室内に落ちている。腰石は直接地山面に据えられ奥壁に1枚、東・西両壁に3枚ずつ配する。床面は古く開口してたこともあり、ひどく攪乱され西側腰石は基底面まで露出している。屍床配置状況は、このような状態では不明の点も多く、調査で屍床配置を示すような仕切り石など検出されなかった。おそらく屍床配置に関しては当初からなかったと考えられる。玄室内床面には小石等ないが、石室構築時基底面に敷かれたとも考えられる拳大の安山岩角礫や凝灰岩の同じような碎片が認められたが、攪乱がひどく詳細は不明である。

羨道は石室が無袖のため、玄室内とほぼ同じ幅で1.74mを測る。長さは玄門部に天井石が落下し、正確な数値では示されないが、1.8m程度であろう。羨道天井石の有無については現時点では不明である。底面には小さな円礫と凝灰岩の碎片を検出した。このことから前述した玄室内の床面については攪乱がひどく明らかに出来なかったが、おそらく玄室内にも同じように円礫や凝灰岩碎石を敷いていた可能性が強い。

石室に用いられた用材の大部分は安山岩であるが、一部に凝灰岩の切石を使用している。

4. 装飾文様

装飾文様は東西両面の奥壁寄りの腰石2枚に線刻で描かれている。この他、玄室中央部の腰石にも線刻があるようであるが、前者に比べこれらは構図的にもしつかりせず、線の太さも異なるなど後世の悪戯書ではないかとの疑問も残る。

東壁の装飾文様は幅1.62m、高さ0.76mにわたり約10艘の舟と、木葉状の文様を描く。舟は形態的にはゴンドラ形のもの、帆をかけたものなどみられる。石室は古くから開口しているため、後世の追刻もかなりみられる。しかしこれらは線の太さ、構図的な点で判別される。

西壁に描かれた文様も同様に舟であるが、東壁のものに比べたら写実的である。西側の文様は、東側が平滑な面を程する石であるのに対し、表面はラフな石で凹凸がはげしい。描かれている舟は、長さ75cm、高さ55cmの帆かけ舟1艘である。なお舟の右側には大□の字が書かれており、線は太さ、タッチとも同じものである。

別図 (Fig 6・7) に掲げた図は拓本を元に作図したもので、明らかに後世の悪戯書きとわかるも

のは除外している。

5. 出土遺物

遺物は大別すれば、時期的に古墳時代と中世のものがある。古墳に伴う副葬品は、前述したようにすでに盗掘を受け調査での出土も期待薄であった。しかし、かろうじて羨道側にずれ落ちた天井石付近から鉄器と鉄滓、それに土師器片が出土した。羨道からも須恵器、土師器の破片及び鉄滓が出土した。墓道からも土師・須恵器片が鉄滓が出土した。

中世の遺物では、玄室内から染付椀片とスリバチまたはコネ鉢の破片が、羨道からも糸切り底の土師器が出土した。

鉄器 1は円頭広根の斧箭式鉄鏃で、茎の部分を欠く。残存長7.0cm、身幅3.9cm、厚さ0.4cmを測る。2は刀子片で、刃幅1.5cmで切先に近い部分であろう。3も刀子片で、茎部分である。幅1.0cm、全面に木質部が残る。2・3は出土状態からみても同一個体と思われる。鉄器はすべて玄室内出土。

土器 4～8は杯の蓋で、内面に返りを有する。4・5は暗灰色を呈し、焼成はともに堅緻である。6は灰黄色をなし、焼成はやや軟質である。復原口径10.0cm。7は焼成のあまいもので、赤褐色をなし、部分的に灰色を呈す。8は口径10.3cm、器高3.0cmを測る坏蓋で頂部に宝珠形の鈕を有す。9・10は坏の身で、9は口径8.6cm、器高3.0cmで底部にヘラ記号がある。11は長頸の壺で口径9.1cmで胴部は不明である。12も長頸壺の胴部で、肩がはり、上半部には2本の沈線とカキ目がみられる。胴部径17.8cm。13は脚付壺の脚部で、高台部分は貼付である。18～23は甕または壺の破片で、18・20は同一個体である。すべての内面に青海波の叩きを有する。以上須恵器はすべて羨道または墓道中出土。

14～17は中世の遺物で、14は染付椀の口縁部片、15は底部に糸切りを有する土師器である。16・17は高台付の土師器で、15・16・17とも焼成はあまい。14が玄室内の他は、羨道および墓道中出土。

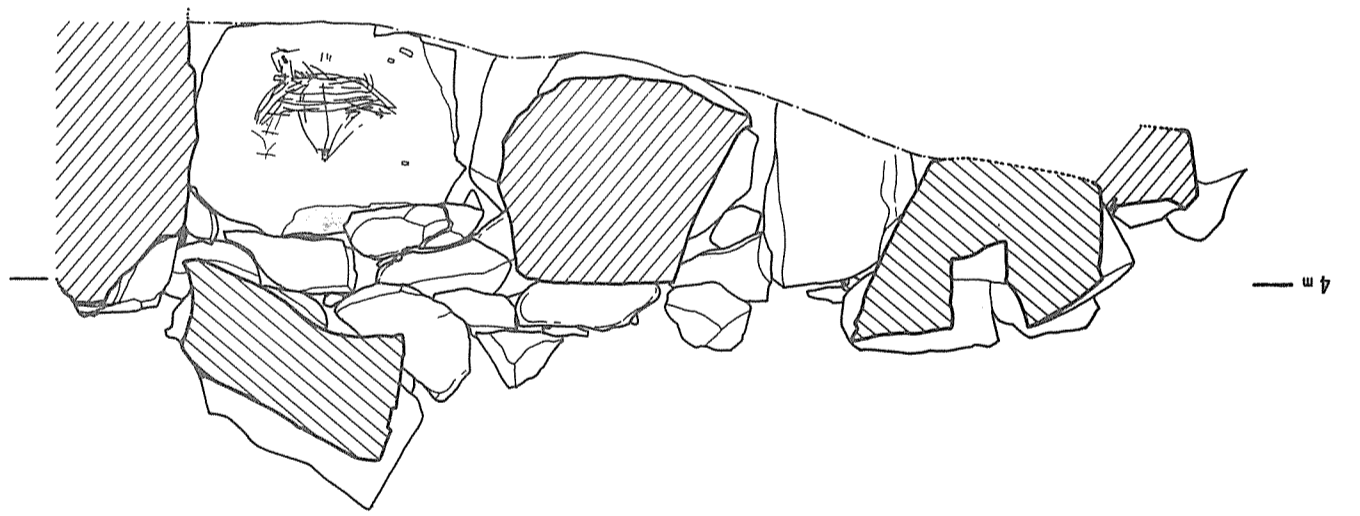
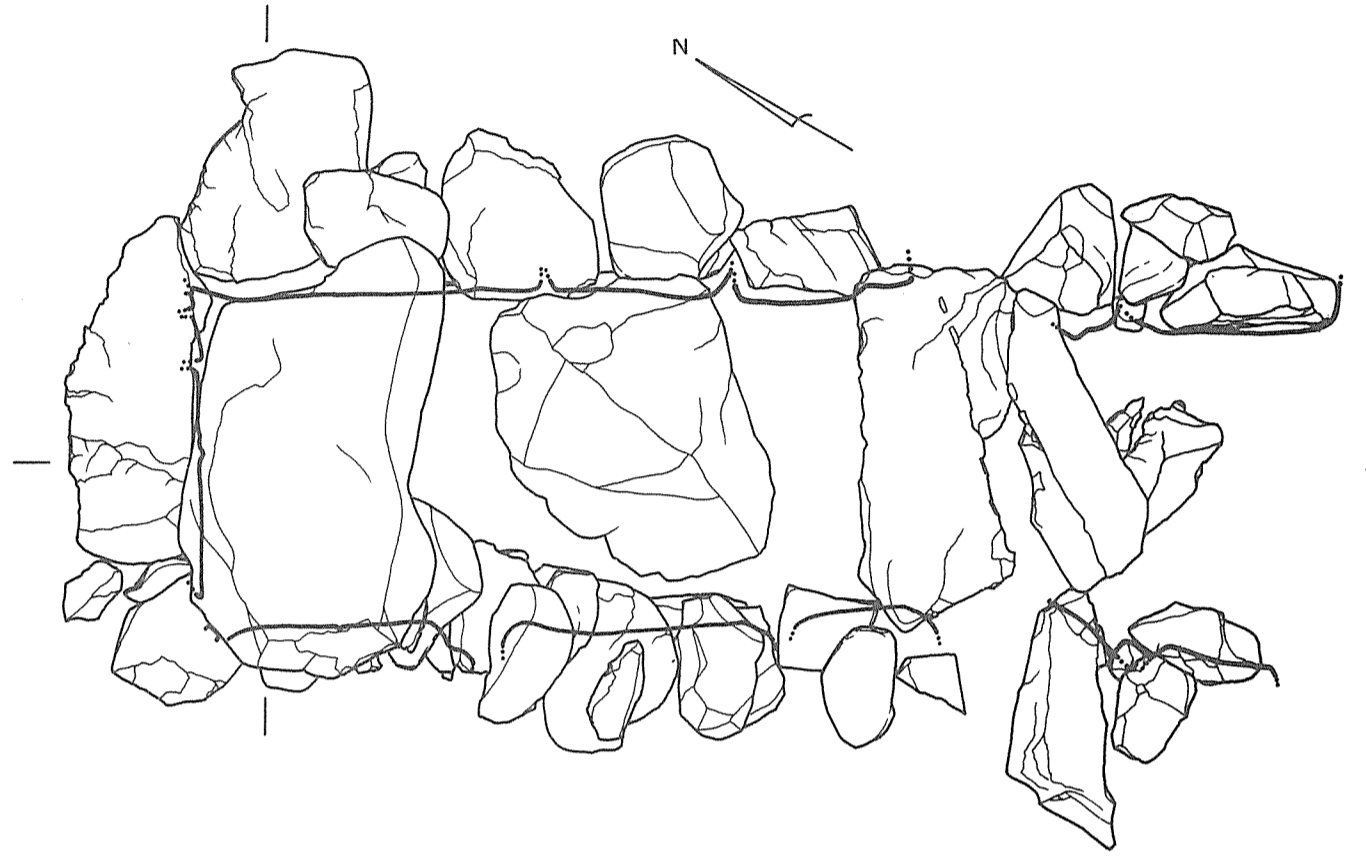
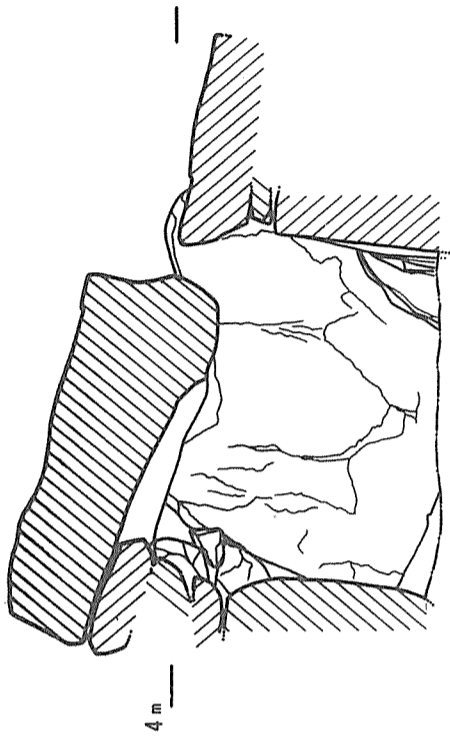
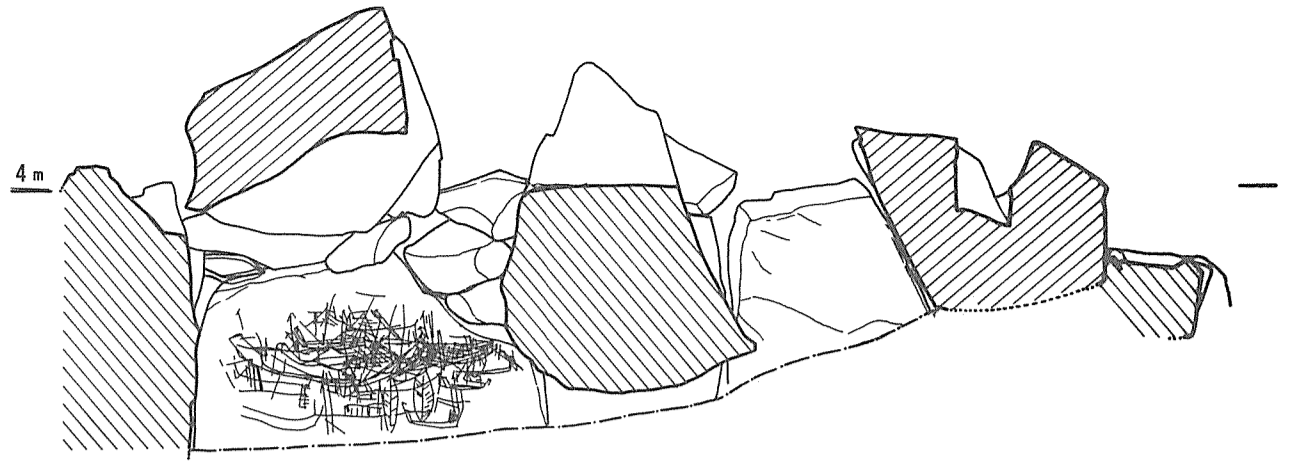


Fig5 石室実測図 (縮尺1/40)



Fig6 西側壁裝飾文様 (縮尺 1/10)

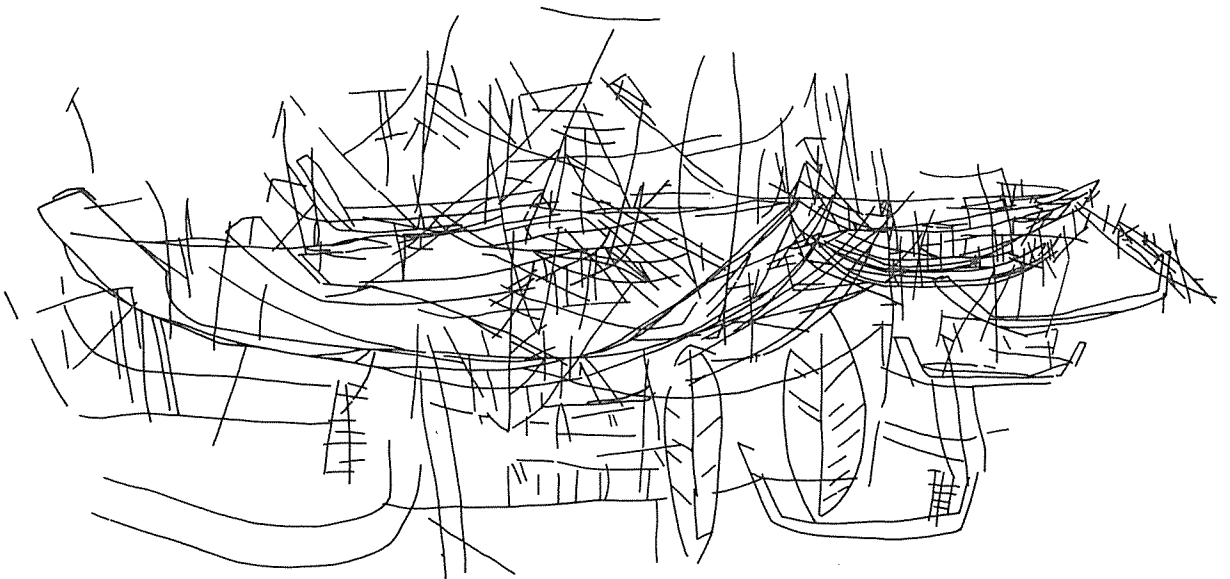


Fig7 東側壁裝飾文様 (縮尺 1/10)

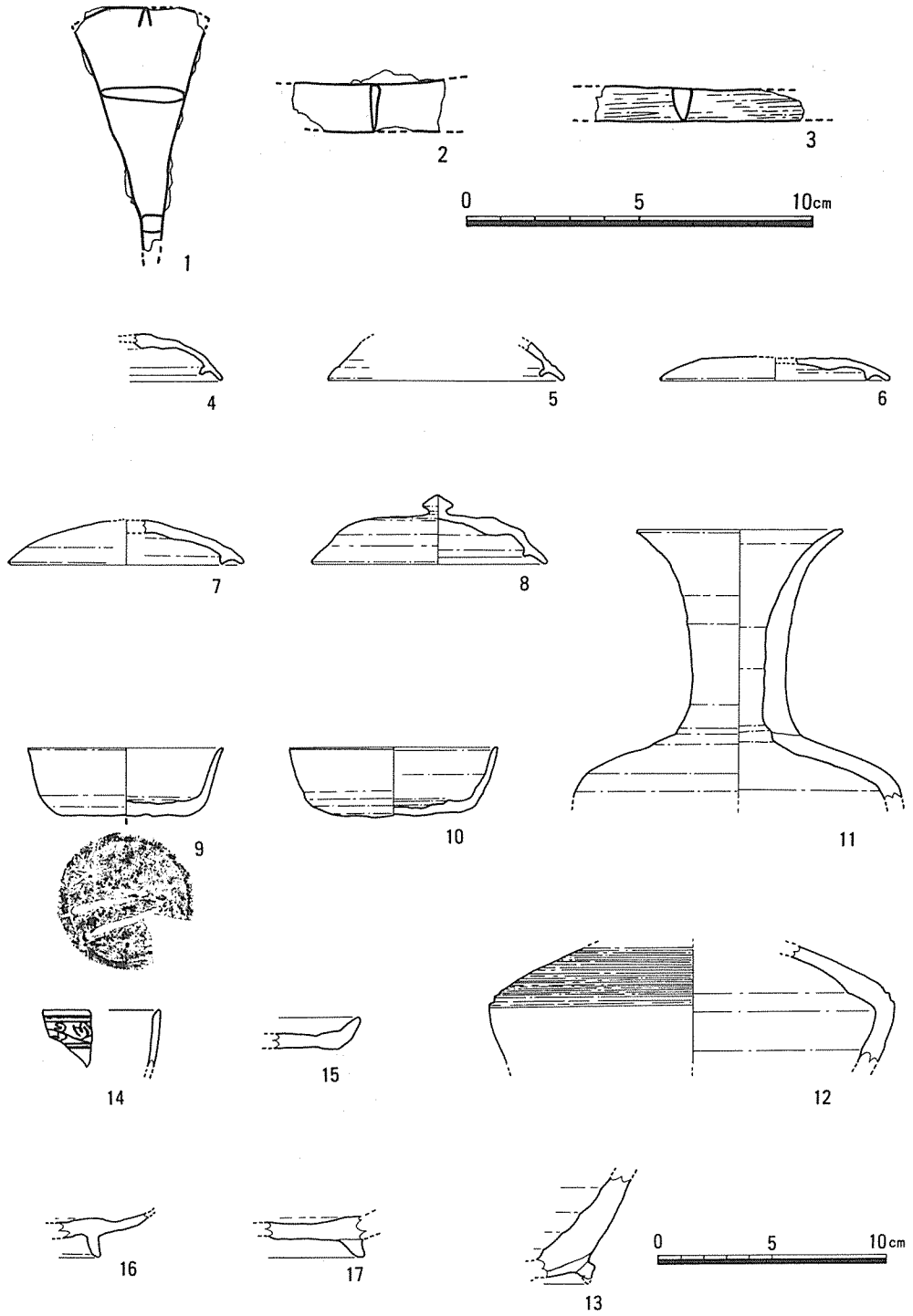


Fig8 出土遺物実測図-1

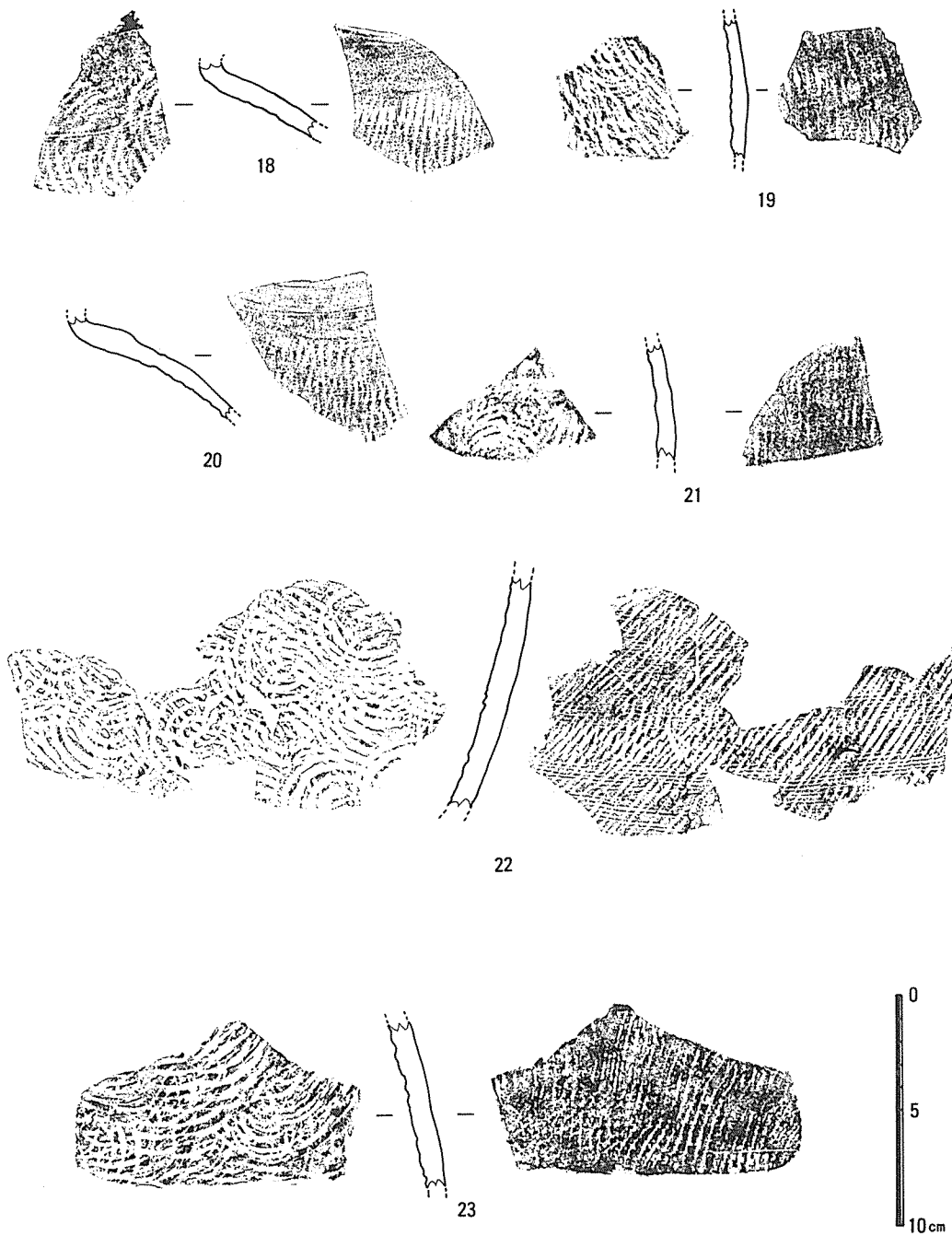


Fig9 出土遺物実測図 - 2

第Ⅲ章 結 語

前述したように今回行った仮又古墳の発掘調査では、数多くの資料を得ることが出来た。特に本墳の装飾文様にみられる舟をモチーフとした線刻の装飾古墳は、宇城地方を中心に分布するが、その時期については従来から漠然としたとらえ方しかされていなかった。

しかし今回、仮又古墳でその時期の一端を伺知れたことは、鉄滓の供献例と合わせ大きな成果であった。しかしこの他、今回の調査ではいくつかの問題点もあげられる。そこでここではこれらの問題点について若干の考察を加えまとめたい。

立地 本墳は丘陵傾斜面の中復に営まれ立地上好適地とはいえない。一方脚下の狭隘な谷を挟んだ丘陵上には、石室構造等から同じ時期の所産と考えられる。東畑1、2号墳、金嶽山古墳が所在する。これらはいずれも丘陵鞍部に位置し、仮又古墳に比べると好条件の場所に立地する。

このように同時期、同一地域における4基の古墳の中で仮又古墳だけ立地が異なるのは、当時同一集団の中でも、古墳築造の占地にあたっては、何らかの規制の基に行なわれた結果といえよう。

墳丘及び外部施設 墳丘は、歪な円形をなし、石室の天井石を露呈するまでに流出している。それは前述したように立地上の条件からである。墳丘は、後述する列石のため基底面までの調査は出来なかった。しかし石室構築で掘り込みがみられないことや、他例からして、まず第1段階で丘陵面をテラス状に削平地業する。次に地山面に直接腰石を配し、側壁付近まで盛土を行う。この時点で平行して列石を北・東側に巡らし、天井石を架設し最後に盛土で覆うこのような工程で墳丘が築造されたと思われる。

列石は墳丘の北側と、東側を取り巻くように三段巡るが、西側部分ではみられない。列石は墓域を画するためと、明らかに盛土の流出を防ぐ目的に造られたもので、地形的なことに起因する外部施設である。また列石が丘陵の上部に続く西側で検出されなかったのは、その証左となろう。

近年列石については福岡県内の集成が行なわれ45例の古墳が上げられているが、本県では従来あまり注目されていない。しかし熊本市上高橋町の小松山1号墳^{註2}や、植木町の横山古墳^{註3}、河浦町の鬼塚古墳^{註4}などで同様の列石が検出されている。

この中で小松山1号墳では急傾斜面にみられることから、やはり土留めの目的で造られたものであろう。墓道は通常みられるものとは様相の異なったものであるが、まず墓道内から出土した須恵器に時期差があること、さらに羨道前面にあることなどから、この施設が墓道として

利用されたのは疑いない。

石室 石室は攪乱がひどく、特に玄室床面は石室基底面まで荒され、床面の屍床配置なども不明である。用材はそのほとんどに安山岩を用いるが、中には凝灰岩の加工した石材も混入する。これは列石の中にも一部凝灰岩の板状石材が混っているのと考え合せ、古墳築造時に別の古墳の石材を用いたことも考えられる。また石室構築の際、平面プランの最も基礎となる腰石は、前にも述べたように直接地山に据えられているが、当然この段階で石室の企画性にに基づき、何らかのモジュールに基づき行なわれているが、今回は羨道例にずれ落ちている天井石の除去をやっていないので詳細は明らかでない。

装飾文様 つぎに本墳のもつ特色の一つでもある装飾文様についてみてみたい。装飾文様は、東西両壁面のみにもみられ奥壁にはみられない。そのため、壁にはラフな面を呈する腰石を配するなど、当初から文様を描く計画がなされていない。

東壁面の文様は、数種類の舟を約10艘、それも無造作に重なり合って描いていることから、葬送に際し供献の意味合いを込め描かれたものと考えられる。また西壁面には東壁面に比べ、舳先、帆柱、水縄、蟬口など表現し、他例に比べかなり写実的なもので、古墳時代のものとしては疑問が残る。さらに文様の右肩に舟の文様と同じ線の太さで「大□」の字を書いたり、後述するように出土遺物からも中世すでに開口しており、この時点で西壁の舟の文様が描かれたことも十分考えられる。

東壁の文様に表わされているように、舟は艀辺から出た艀の数などから川舟ではなく、明らかに海を航海する構造船で被葬者の生前における海との関係を示唆する資料といえる。線刻で舟を現わす装飾古墳は、近年城北地方の横穴でも確認されたが、^{註5} おおむね宇土半島基部に集中して分布し菊池、山鹿地域と宇土半島基部では装飾の表現の方法、およびモチーフ等にも大きな差異がある。おそらくこれは、当時の文化の違いを如実に表わしていると言え、換言すれば、古墳文化の根底に流れているものに、菊池、山鹿が川の文化とすれば、宇土半島基部の文化は海の文化とでも言えよう。一方線刻の装飾古墳を微視的な目でみれば、本地域でも総てが宇土半島山塊側だけに分布し、雁回山側にはみられない。これは一つに宇土半島山塊側が地理的にみて海側で、より海との係わりの強い地域にあること、またこのタイプの古墳の石材に用いられている安山岩が宇土半島大岳系の噴出岩であることなどが要因として考えられる。しかし線刻の装飾文様をもつ古墳は大分県や、出雲地方にも分布がみられ、特に山陰地方では種々の点で肥後地方との有機的なつながりが強く、この点については今後の究明をまちたい。

出土遺物 調査では古墳に伴う遺物である土器類と少量の鉄器、鉄滓と中世の陶磁器類が出土した。石室は古く開口している関係で、遺物は少なく、しかもそれらは現位置での出土であるかどうかは不明である。この中で今回得た大きな成果の一つに鉄滓の出土がある。鉄滓はいわゆる製鉄時に生じる残滓で、それ自体に物としての意味があるわけではなく、その点他の副

葬品とは区別して扱わなければならない。また出土箇所は5個中4個までが、羨門前半部から墓道にかけ集中している。そのようなことで鉄滓は副葬というより、いずれも供献されたものである。鉄滓を供献する古墳は、北部九州地方（特に博多湾周辺）に集中して分布するが、本県に於ては以前数例調査がなされているもの^{註7・8}、確実な例としては今回が初例である。先年熊本県で行なった生産遺跡基本調査の中で、大岳製鉄遺跡群として19ヶ所の製鉄遺跡が調査されているものの、年代は小岱山と同様古代末から中世にかけてとされている。しかし本市松山町の向野田古墳^{註10}にみられるように多量の鉄器を副葬するなど、この地域の古墳文化の経済的基盤の一つとして鉄の生産があるとされる松本雅明氏^{註11}や井上辰雄氏^{註12}の論考もある。仮又古墳の鉄滓供献例が、大岳製鉄遺跡群にそのまま続いていくものかは、現時点では不明であり、今後の調査例を待ちたい。

この他、玄室内から明時代嘉靖期の染付椀付椀片と、スリバチまたはコネバチの破片が出土したが、これらは羨道部から出土した糸切底の土師器と合わせ、本墳がすでに中世には開口をしていたことを示す遺物である。このように古墳から中世時代の遺物を出土する例はよくあり、中世時代の塚信仰あるいは開口時に伴う供献とみられる。また本墳の北側に「甚^{註9}□壽幸□是尼中月清圓居士 實清真祥是尼 永祿七^{註9}年九月 日」銘の板碑があり、前述の遺物はこの時期に付合し、板碑は古墳開口と関係があるとも思われる。

築造年代および被葬者の性格 遺物の中で時期を示すものとして須恵器の出土がある。この中で須恵器の坏をみれば、器形は全体的に小形化し、蓋には擬宝珠状の鈕がつき、本来なら身の部分につく返りが蓋についてくる時期のもので、小田富士雄氏のいう九州編年の5期にあたる^{註13}。またやや時期の下と思われる土器も出土しているが、これは墓道の存在と合わせ追葬が行なわれたことを示している。このようなことから本墳の築造年代は7世紀の前半代でもやや新しい時期の所産と考える。

最後に被葬者の性格について触れてみたい。本墳は飯塚の狭陸を谷を望む丘陵上に営まれているが、これは明らかにこの谷を意識しての築造といえる。この谷間からは現在までのところ古墳時代の遺物の出土がないが、仮又古墳の東約500mの北平遺跡からは弥生時代から古墳時代にかけての遺物が採集されている。このようなことから言及すれば古墳時代飯塚の狭隘な谷は地形的にも生活活動の場として利用し、谷の出入口にあたる微高地上の北平遺跡に居住域を設けたと考えられる。しかし被葬者や装飾古墳が示すように生前海への指向性も具備し、併せて鉄の生産にも関与しているように、もっと広い範囲での行動も当然行なっていたであろう。このような中において墳丘の周囲に列石を巡らしたり、鉄滓を供献するなど北九州的な要素を取り入れることが出来たといえよう。

註

1. 前田義人『こうしんのう1号古墳』北九州市埋蔵文化財報告書第8集 1981 福岡
2. 乙益重隆・佐藤伸二他「小松山1号墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』1969 熊本
3. 上野辰男・桑原憲彰「横山古墳」熊本県埋蔵文化財調査報告第41集 1980 熊本
4. 国學院大學、池田栄史氏のご教示による。
5. 石貫古城40号 熊本県文化課高木正文氏のご教示による。
6. 柳沢一男『広石古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告第41集 1977 福岡
7. 松本健郎「野原八幡古墳群調査概報」『玉高考古学部報第31号』1973 熊本
8. 坂本経堯『荒尾野原古墳』1953 熊本
9. 松本健郎『生産遺跡基本調査報告書I』熊本県埋蔵文化財調査報告第38集 1979 熊本
10. 富樫卯三郎ほか『向野田古墳』宇土市埋蔵文化財調査報告第2集 1978 宇土
11. 松本雅明「古墳文化の成立と大陸」『古代アジアと九州』1973 東京
12. 井上辰雄『火の国』1970 東京
13. 小田富士雄「九州の須恵器」『世界陶磁全集2 日本古代』1979 東京

PLATES



仮又古墳遠望（東側より）



調査前の状況（西側より）



調査前の状況（羨門側）



調査前の状況（玄室部分）



N - T 列石出土状況（西側より）



N - T 列石出土状況（東側より）



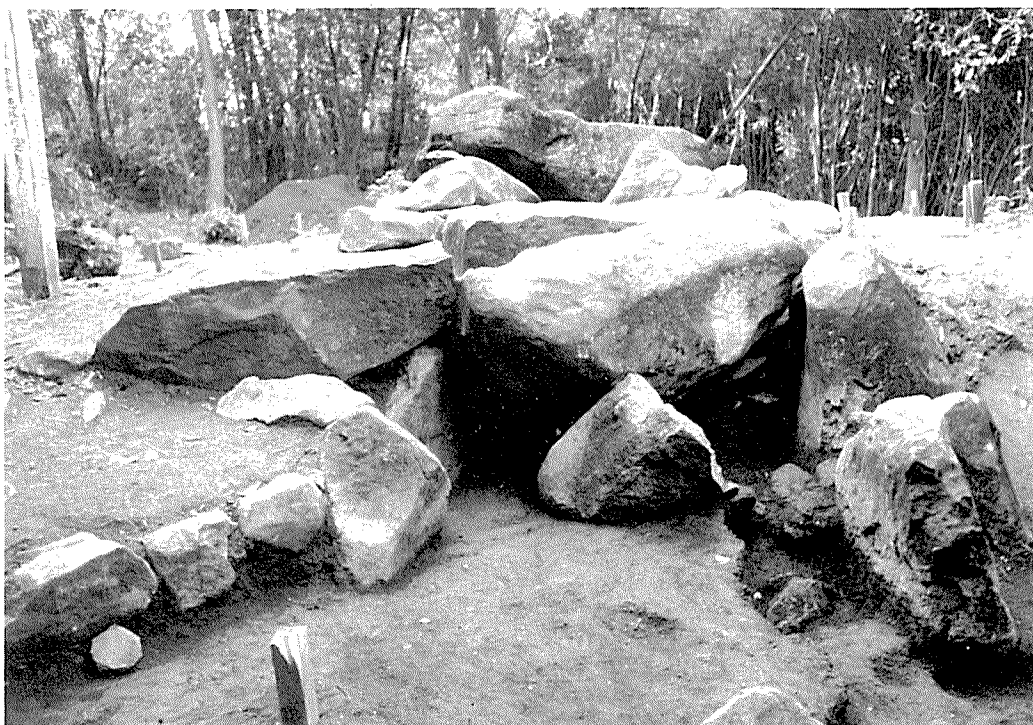
N - T 列石出土状況 (北側より)



N - T 列石出土状況 (南側より)



N - T 列石出土状況（西側より）



石室清掃後の状況（羨門側より）



S - T 墓道検出状況（北側より）



石室清掃後（奥壁側）



石室清掃後（羨門側）



羨門部鉄滓出土状態

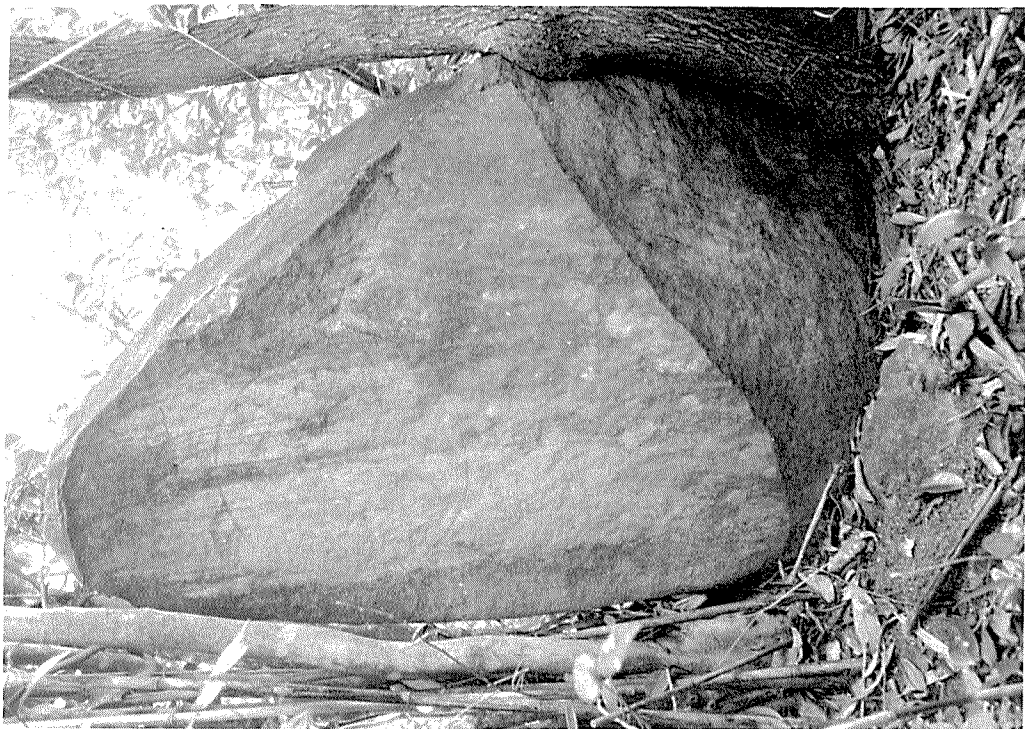


玄室内遺物出土状態（瓦質土器）



玄室内遺物出土状態（染付片）

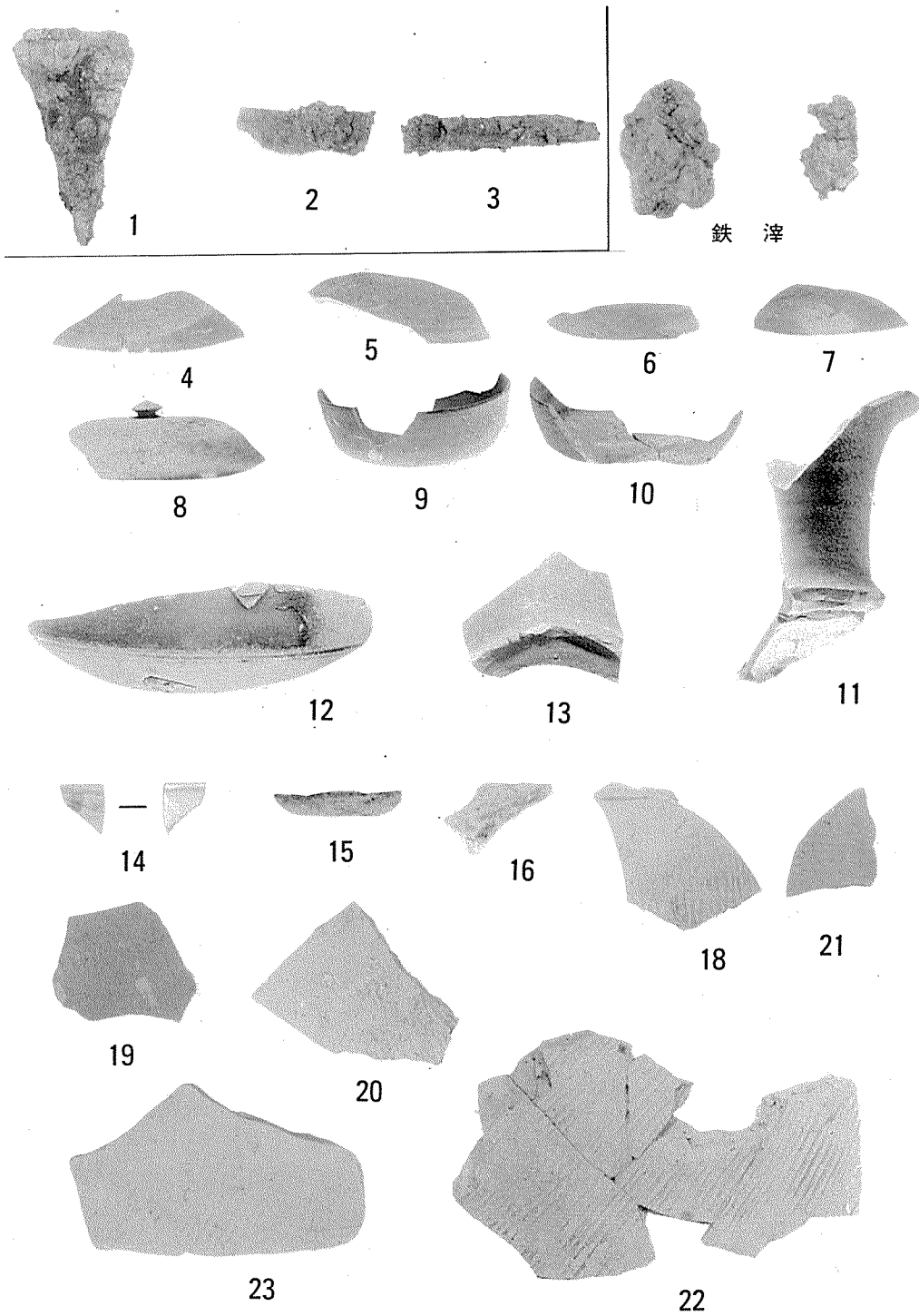
PL 9



永禄7年銘板碑



玄室内遺物出土状態



出土遺物 (1~3は約 $\frac{1}{2}$ 、他は約 $\frac{1}{3}$)

仮 又 古 墳

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第6集

1982年3月

発行 宇土市教育委員会

印刷 (資) 下 田 印 刷

兼古反司

（此處文字模糊，疑似為序言或說明）

（此處文字模糊，疑似為日期或卷號）

（此處文字模糊，疑似為作者或編者姓名）

（此處文字模糊，疑似為出版或印刷信息）
